

私の住んでいる新宿区は、新宿駅と池袋駅というターミナル駅に挟まれ、3つの大学病院に加え国立病院、公立病院など急性期医療を担う大病院が存在する地域である。つまり、入院、通院できる医療設備は十分に整っているとされる地域の一つである。

一方、近年増加している高齢者に対する要支援・要介護に関しては、どのように対応しているのでしょうか。

昨年、近所に住む私の曾祖母が転倒し、入院するということがあった。99歳という高年齢にもかかわらず、よく食べ、散歩し、医療の世話にもならず、まさに健康児ならぬ健康婆であった。それが、自宅で転び大腿骨骨折を起こし、入院することになった。そこからが大変であった。骨折と共に体の不調が判明し、年齢や住宅環境を考慮すると前と同じような生活を送るのは厳しいとのこと。ちょうど、入退院の時期が、試験休みや春休みと被った、唯一暇な若者である私が、曾祖母の一人娘である祖母と一緒にこまごました手続きを手伝った。まずは、病院の地域医療センターで、ソーシャルワーカーと療養生活上の注意点や、介護福祉のサービスシステムについて説明を受けた。次に、居住地の管轄であり地域包括支援の要である新宿区高齢者総合相談センターに相談するのがいいと教えていただいた。新宿区は以前より、在宅医療、訪問診療に対して積極的に医師会が活動しているという地域であり、緩和医療を行う診療所や訪問看護ステーションが多数存在している。入院している病院の主治医、ソーシャルワーカー、ケアマネージャーの人たちとよく話し合い相談した。自宅の暮らし方や病状を踏まえ環境の整備や医療、看護、介護サービスの受け方を検討していただき、家族だけで話し合っても、なかなか結論ができない事柄に対して、一つ一つ丁寧に対処法や今後の支援を適切に受けることができるようにしていただき、強力なサポーターとしてのとても心強い存在であった。

今まで私は、ブラックジャックのような天才的な腕を持った医師や医療従事者により医療が成り立っているのかと思っていた。確かに、私たち若者自身が何か重度の病気や外傷を負った際は、最先端医療を受けたいと思うし、大きな病院がそばにあれば安心感がある。しかし、ますます高齢者が増える現代社会では、積極的な治療だけではなく緩和ケアや介護の視点からも医療をとらえる必要がある。新宿区が行っている地域包括支援はこの観点から考えると、まさに地域で支える地域医療の形ではないか。

医療は生きるためにあるものである。しかし、人間は永遠に生き続けることはできない。いつかは終わりを迎えるのである。その終わりをいかに納得のいくものにしていくか、その一端を担っているのは地域医療なのかもしれない。まさにそれらのことを実感させられた新宿区の地域医療はスゴイ！と感じた。(1156字)